ぬいぐるみな彼

神山奈月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぬいぐるみな彼

【Ｎコード】
Ｎ７７３４Ｘ

【作者名】
神山奈月

【あらすじ】
――くまがしゃべった！？――ぬいぐるみの『くま』になってしまった記憶のない少年と人付合いが苦手な少女の物語。

鍋とお玉

私の目の前にいるのはクマのぬいぐるみの『くま』。小さいときに両親に買ってもらった私の大切な家族である。茶色のふわふわの毛に覆われた丸い瞳がなんとも可愛らしい。その瞳がこちらを向いて……向いて？

「わあああああっ！」

私もくまも同時に叫んだ。ってか待って！　くまがしゃべった！

いやその前に動いた！

持っていた鞄が手をすり抜け床に落ちた。その瞬間私は部屋から飛び出し、階段を駆け降りた。そしてキッチンに向かい、お鍋とお玉をゲットすると部屋に戻った。その間、１５秒。

すぐさまベッドの上にいるくまの側に行き、逆さまにしたお鍋で閉じ込める。

「おい、何すんだよっ！」お鍋の中からくぐもった声がした。私はお鍋を押さえ、右手にお玉を掲げながら言う。

「あ、あなた何者？　悪魔とかゆ、幽霊とかじゃないでしょうね？」

お玉を握る手に力が入る。「は？　あー多分、悪魔じゃないと思うぜ。幽霊かどうかはわかんねーけどな」

最後に記憶ないし、と彼？　は呟いた。

「えっ記憶ないの？」

「ああ、だから何でこんなことになったのか俺にもわからないんだよ」

……そっか。彼にもわからないんだ。なんだか、悪いことをしたかもしれない。

「なあ、まず話し会わないか？　さっきは驚いて悪かったよ」

結構いい人そう。というかいい人。

「……うん。こっちこそ、ごめんなさい」
私はお玉を置き、お鍋をそっと持ち上げる。彼はちょこんとそこに座っていた。私はそれがたまらなく可愛く見えて、つい、いつものようにぎゅーと抱きしめた。だが、はっと気づいて離れる。
「わっごめんなさい。ついいつもの癖で……」
「いや、別に」
彼はそっぽを向いてしまった。その顔が赤く見えたのは気のせいだと思う。

ネーミング

ただいま私は彼と目線を合わせるために床の上に正座している。なんか叱られている気分。それより、話し合うって何から話せばいいんだろう。しばらく考えてから口を開く。

「えっと、私の名前は坂口みやびです。高校1年です。好きなものはくまと甘納豆、あっ、あとカステラも好きです。嫌いなものは……」

「ストップ！　……なんで自己紹介？」

「へっ？　だって初めて会った人にはやっぱり自己紹介からかなあと」

何がいけなかったんだろう？　と思って彼を見ると、彼はこちらを見て笑った。

「お前、面白いよ。でも、俺記憶ないし、自己紹介はできないな」

「ああ、そうだった！」

……ということは

「名前もわからないの？」彼はうんと言った。でも名前がないと不便だよね？　「ねえ、名前つけていい？」

私は身を乗り出して言った。言っちゃあなんだけど、私は名前をつけるのが好きだ。他のぬいぐるみにも、しっかり名前がついている。

「いいけど、変な名前は」「くまだからくーちゃん！」

「却下」

「くまっち。くま太郎」

「全部却下」

何分か経った。彼は全ての名前候補を却下した。極めつけに

「お前、ネーミングセンスないな」

と言われた。なんで？　どれも素敵な名前なのに。

「じゃ、じゃあ……テディベアの……てっちゃん」

私なりに頑張って出した名前だった。彼はしばらく無言だったが一つため息をつくと、いいよそれでと呟いた。

「わーい、てっちゃんだー」

私が嬉しそうに言うと、てっちゃんも優しく微笑んだのでよしとする。

よろしく

てっちゃんとは大分打ち解けたと思う。最初は驚いて軽くパニックだったけど。てっちゃんがくまの姿だからか、楽に話せてる気がする。

てっちゃんのことについて分かったことをまとめると、てっちゃんは私が部屋に入ってくる30分くらい前に気がついた……目覚めた？　らしい。鏡を見て自分の姿がくまのぬいぐるみなのに気づいたのが、その数分後。てっちゃんは記憶喪失だけど自分以外の、例えば世間一般の常識とかは覚えているのだそうだ。だから

「くまのぬいぐるみのような生き物がいるわけないじゃん？　……俺は人間だと信じてる」

とはっきりと言っている。

結局、てっちゃんが何者かという疑問は晴れないまま、メモ用紙の最後に『てっちゃん↓男、人間？』と書いておく。

疲れたなあと思って外を見ると、すでに真っ暗。そういえば、帰宅してからずっとてっちゃんと話をしていたんだ。壁にかかっているオレンジ色の時計をみるといつの間にか夕食の時間になっていた。

「お前の両親、いないのか？」

不意にてっちゃんに聞かれた。なぜそんなことを聞くのかなあと、ぼんやり思っていたけど、普通の一軒家に住んでいるのに、夕食の時間になっても誰も帰ってこないのは、他人から見れば変かもしれない。

「二人とも海外で仕事してるから、年に2回くらいしか会わないの」

てっちゃんが少し眉をひそめたように感じたので、笑顔で大丈夫だよ、料理は得意だからと言ってごまかした。てっちゃんはやっぱり優しい。そのことについては、その後何も聞いてこなかった。

夕食にしようよと、私は立ち上がって、てっちゃんの両腕の下を

持って抱き上げた。軽い軽いと思っていると、てっちゃんが自分で歩くと言い出した。「私が運んだ方が早いよ？」と言うと大人しくなった。どうしたんだろうと思っていると、
「……記憶が戻って、俺がもとの体になるまで、ここで世話になっていいか？」と真剣な顔で言うのでびっくりした。私はてっちゃんの目を見て答えた。
「最初は驚いちゃったけどてっちゃんが優しい人だってわかったから、私てっちゃんの話聞いてるときから手助けしようって思ってたよ」
てっちゃんは丸い目をさらに丸くしていた。
「だからこちらこそよろしくね」
こんな言葉、誰かに言うのは久しぶりだ。
「……ありがとな」
てっちゃんは手で顔を隠すようにしていたけど、照れていることはすぐにわかった。でも私も多分、顔が熱かったから一緒だね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7734x/

ぬいぐるみな彼

2011年10月21日08時02分発行